

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 21日現在

機関番号：15201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653040

研究課題名（和文） 過疎集落における共生のための実験的研究

研究課題名（英文） An Experimental Study to Create Sympathy in Depopulated Villages

研究代表者

吹野 卓 (FUKINO TAKASHI)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：70228873

研究成果の概要（和文）：本研究は、過疎集落において「聞き書き文集」を発行し、それが住民間の「共感形成」に及ぼす効果を検討する実験的な研究である。文集のような日常的対話とは異なる新たな媒体が一定の効果を持つこと、および過疎化・高齢化が進行している集落では「家」の垣根を越えた援助行動が必要となっており、そのために住民相互の「共感」がもつ意味が大きいことが判った。またこの手法は地方自治体の新人研修に応用された。

研究成果の概要（英文）：This project is an experimental study in depopulated and aging villages. We interviewed residents about their lives in such villages and wrote what they said. We collected those writings into book, and gave it to all households in the village. The purpose of this study is to investigate this book can be a new media to create sympathy among residents.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	0	600,000
2010年度	600,000	0	600,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	210,000	2,110,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：過疎化・高齢化・聞き書き文集・共感

1. 研究開始当初の背景

過疎化の進行過程において、集落の共同体は単に戸数が減少するだけでなく、残された「家」もその機能が弱体化していくという問題が生じる。伝統的な集落共同体は「家」同士の連合体として組織されてきたが、その役割を果たせない「家」も出てくるのである。そのような集落においては、従来の「家」の垣根を越えた新たな人間関係の構築が必要となる。

2. 研究の目的

地域で「家」の垣根を越えた生活上の援助行動が不自然でなく行われるためには、住民相互の「共感」が成立していることが重要であろう。

この研究は、そのような「共感」形成の一助となり得るような新たなコミュニケーション通路の開発と、その効果等について考察を行うことを目的としている。より具体的には、以下の2つを期間内での目的とする。

(1) 住民の語りに基づく「聞き書き文集」を

作成しそれがどのように読まれたのかを調べることによって過疎高齢化が進む集落における「共感形成」について考察を深める。
 (2)「聞き書き文集」の手法をフォーマット化し自治体の新人研修などで応用可能なものとして提供して持続可能なものとする。

3. 研究の方法

研究方法は基本的に以下の通りである。

- (1) 学生を調査員として集落の全戸を対象とした聞き取り調査を実施し、それにもとづいて文集形式の冊子(「聞き書き文集」)を作成する。
- (2) 完成した「聞き書き文集」を対象集落の全戸に配布する。
- (3) 対象集落で再び聞き取り調査をし、「聞き書き文集」がどのように読まれたのかを調べる。
- (4) このような手法を繰り返しながら、集落内での日常的対話等では見えて来ない隣人の姿を知ることが相互の共感形成にどのような役割を果たすのか等について考察をする。
- (5) 持続可能なものとするために「聞き書き文集」作成手法をフォーマット化し自治体の新人研修などで応用可能なものとして提供する。

「聞き書き文集」のフィードバックという研究者側からの働きかけを含む実験的な手法であること、および応用可能な形として社会への還元を目指している点がこの研究の方法論的特徴である。

なお、研究期間中に作成した「聞き書き文集」は以下の5編である。いずれも島根県内の過疎・高齢化が進行しつつある地域を対象としている。

実施年度	実施地
2009 年度	隠岐の島町中村地区
2010 年度	隠岐の島町中村・布施地区
2010 年度	雲南市吉田地区
2011 年度	雲南市木次地区
2011 年度	松江市忌部地区



図1 作成した聞き書き文集

また、研究チームは研究期間前の2007年度にも雲南市で1編の作成を行っているので、研究成果としては、そこで得られたデータも含めて考察をおこなっている。

4. 研究成果

(1) 集落内における新たなコミュニケーション通路としての聞き書き文集の働き、すなわちそれがどのような「場」であったのかについて、以下のような知見が得られた。

① 他者を通じた自己との出会いの場

文集の内容を深みがあるものにするためには、あえて「生きがいとはなんですか」といった大きなテーマで話して頂くことが有効であった。このような問いは、問われることによって初めて考えてみる場合が多い。聞き取り場面のテープ起こしのデータを詳細に検討すると語り手が自問しながら回答していく様子がよくわかった。また、調査員がまとめ直した文章として自分の語りを読むことによって、自分について再考する機会となり得たことも事後の調査から判った。

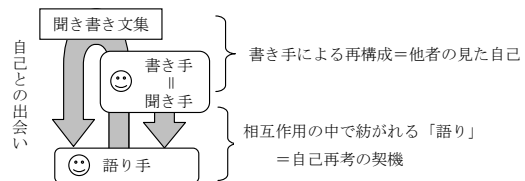


図2 他者を通じた自己との出会い

② 時間軸の中での語り

調査員が学生または市の新人職員という若者であったこともあり、戦時中の話や昔の暮らしの話などが多くなされ、語り手の厚みのある人間像を捉えることができた。そして、この語りは文集という形でまとめられているので、子供や孫という次の世代、未来への情報伝達の場ともなっており、事後の調査でも孫が語り手の過去の事を初めて知ったといった例もいくつかあった。

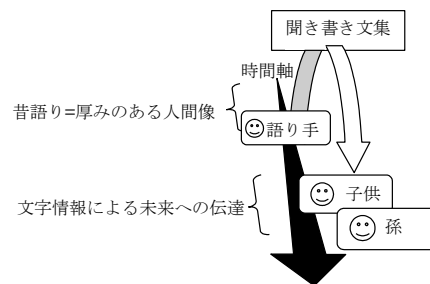


図3 時間軸の中での語り

③他者を通じた隣人との出会いの場

集落内の隣人が読むことを前提とした語りも多くなされていた。たとえば障がいを持った人の事情、地区活動へ参加できない人の申し訳ないという思い、買い物などのために車を出しても良いという申し出、等々が語られており、これらについては事後調査でも文集を通じて初めて知ったという集落の人の感想を聞くことができた。このように文集というワンクッションを置くことによって、日常的な人間関係では語れないことが語られる場となっていた。また、(他人であり若者である)調査員に対して話す内容は、当然ながら日常的な家庭内や集落内での会話内容とは異なっており、なかには今まで誰にも話したことが無いことを話したという語り手もいた。このように隣人についての新たな姿を知るための場となっていた。

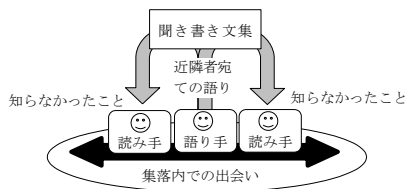


図4 他者を通じた隣人との出会い

④他者を通じた集落との出会いの場

文集は同じ集落で暮らしてきた人々の複数の語りがひとつの冊子としてまとめられたものである。これを通して読むと、人々が同じ思いを共有しあっていることも見えてくる。たとえば、同じ集落の何人もの人が集会の後にやっていた梯子しながらお酒を飲むということが無くなったことを残念に思っていることや、かつて炭焼きの村であったことを集落が現在うまくいっていることの原因として捉えていること等々である。このように鳥瞰的に見えてくる集落の姿もあり、聞き書き文集は歴史的経緯の中で形成されてきた集落のアイデンティティ確認の場となっていた。

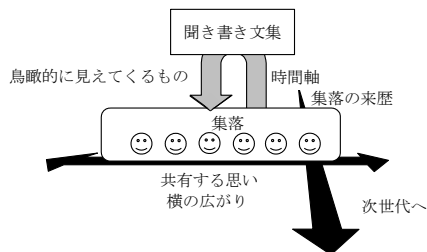


図5 他者を通じた集落との出会い

(2)このような出会いの場としての聞き書き文集作成を通じて、過疎・高齢化が進行する集落共同体のありかたについて、様々な考察をすることができた。

買い物や通院、雪かき、健康確認といった従来ならば家族内で行っていた生活行動、あるいは道造りなどの集落活動への家代表の参加といった事が十分にできない人々も存在している。一方的に助けを必要とする人々にとって、いわゆる「互助」的な発想は、決して「お互い様」ではなく「申し訳ないこと」と負担に感じられる場合も多い。

「助け」「助けられる」ことが負担無く行われるためには、その両者が共に相手を「かけがえのない他者」として感じていることが必要なのではなからうか。すなわち「共感」を確認しあいながら生活をしていくことが重要だと思われる。

田舎と呼ばれる地域でも、いやむしろ田舎のほうが家の垣根は高いものである。過疎・高齢化がある程度以上進行した集落では、この垣根を越えていく新しい近隣関係ができていないと住み続けることが困難になる。

「聞き書き文集」自体の集落の共感形成への寄与は僅かかもしれないが、いずれにせよこれまで以上の「共感」を形成していくためには従来とは異なるコミュニケーション通路の存在は有効である。

このようなことを確認できたことは、本研究のひとつの成果であった。

(3)本研究の目的のひとつは、持続可能なかたちでの応用のためのフォーマットを作成することにある。

「聞き書き文集」の作成は、調査員として参加した学生にとっても地域の問題について考察を深める上での学習効果が大きいものであった。この点を踏まえ、より深く語ってもらうために適切な質問項目の選定、聴き取り調査の技術、文章としてまとめていくための技法等々をフォーマット化し、自治体の新人研修への応用を提案した。

その結果、2011年から島根県雲南市の新人研修として採用され、2011年には9人、2012年には8人の新入職員が参加した。

研修としては、やや時間がかかり過ぎるという面もあったが、参加した新入職員からはこれから市職員して働いていくために大切なものを学んだという評価も頂いている。更にこの研修は文集作成の対象となった地域でも評判がよく、他地域からも今度はうちで欲しいという話が来ているということであった。

このような応用という形での社会貢献ができたことも本研究の成果のひとつである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①吹野卓・片岡佳美・江口貴康, 「過疎集落における『共感』形成へむけた試み——聞き書き文集という方法について——」, 島根大学法文学部社会文化学科紀要『社会文化論集』, 査読無, 2012, 8号, pp. 15-24
- ②片岡佳美・吹野卓「家族ライフスタイルの多様化への許容性についての分析」, 島根大学法文学部社会文化学科紀要『社会文化論集』, 査読無, 2010, 6号, pp. 37-51

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吹野 卓 (FUKINO TAKASHI)
島根大学・法文学部・教授
研究者番号：70228873

(2) 研究分担者

江口 貴康 (EGUCHI TAKAYASU)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：10248601

片岡 佳美 (KATAOKA YOSHIMI)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：80335546

福井 栄二郎 (FUKUI EIJIROU)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：10533284

(3) 連携研究者

なし